

春日部福音自由教会 2021年5月16日 11:00 3会堂合同礼拝
(同時配信オンライン合同礼拝)

聖書 新約聖書 Iコリント 11章 26節
説教 「主が来られるまで」小野信一牧師

復活祭後 43 日目の日曜日です。来週は復活祭から 50 日目、聖霊降臨日、洗礼式を予定しています。

主を待ち望みつつ、共に礼拝をささげています。「少し賛美の声を小さめに、より小さめにしましょう」というアナウンスをしていただきました。それから三つの会堂それぞれに、「より換気を多めにしてください」というアナウンスをして頂きました。当面そのようにしていきたいと思います。ここにアクリルボードがありますけれども、アクリルボード+マスクを着用する形で、説教者と司会者もここに立つように、当面の間はしようと考えています。

待ち望みつつ、礼拝をささげましょう。

I いつまでですか

「いつまでなのでしょう。この先の見えない状況は」。何度も何度も、問いかけたくなる問いです。私の思いでもあるし、きっと皆さんの思いでもあるだろうと思います。“いつまでなんだろう。もう疲れたよ”という思いもきっとあるだろうと思います。

「主よ、いつまでですか」。この一年で何度そう思ったことでしょうか。苦しい状況はいつまでですか。このウイルスはいつまで私たちに不自由にするのでしょうか。いつになったらワクチンが届けられ、自由に行動できるようになるのでしょうか。いつになったら世界の国々は、互いに協力し合って、与え合って、支え合っていけるようになるのでしょうか。「主よ、いつまでですか。先行きが見えません」という思いになります。このコロナの感染症の中で、またコロナの後どうなるのか、それもなかなか見えないと思うんですね。今、日本のプロ野球は、観客をなくしたり観客を入れたり、そのように色々切り替えながらしているようです。大相撲もそうです。アメリカのメジャーリーグの野球にはです。かなりお客さんが入ってマスクをしないで、わりと声を出している姿が見えました。多くの人がワクチンを打つようになったら、そうなるのかもしれない。でもそれで本当に大丈夫なのか、よく分からない。オリンピックはどうなるのか。そこが見えないですね。

「主よいつまでですか。この見通しの立たない状況は」。“見えないよ”という思い、“もう疲れたよ”という思い、になります。きっとそれぞれ大人の皆さんも、高齢者の皆さんも、中高生も、青年も、今礼拝堂にいる人も、今家にいる人も、そういうふうと思うんじゃないだろうかと思います。神様からの答えはどこにあるのだろうか。この聖書の中のどこに答えがあるのだろうか、と考えながら過ごしてきました。

「いつまでですか」という問いがですね、聖書の中に時々出てきますね。例えばイザヤ書の6章の11節に。これは、イザヤが神様によって召された時、「だれをわたしは遣わそう。だれがわれわれのために行くだろうか」と主が言われて、「ここに私がおります、私を遣わしてください」と言った、「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。」という賛美の声を聞き、「私はもうだめだ。滅んでしまう。」と言ったイザヤに、主の使いが飛んできて、炭で触れたという場面ですね。「あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された」と言われた、その場面です。「行って、民に告げよ。聞き続けよ。だが悟るな。」そういうふうな告げよって言われたんですね。そこでイザヤは言います。「主よ、いつまでですか」。「荒れ果てるまでだ」。「なお残る人たちがいるけれども、それも焼き払われる。しかしそこに切り株が残る」と言う神様からの災いと、その中に残る幸いの種、神様のさばきと回復のメッセージが伝えられた場面です。

他にも例えば詩篇の79篇にもですね、「主よ、いつまでですか」という祈りがあります。

いつまでなんでしょうか。教えていただけるなら知りたい。見通しが立つなら嬉しい。いつまで待てば大丈夫になるのか。でもそれが中々分からない。そういう中に私たちはいるのではないかと思います。中にはワクチンが自分のところまで届いて、年齢的に上の方から来て、“自分も予約ができました、1回目の接種をしました”っていう人もいるかもしれません。だんだん増えていくでしょう。そうすると少し見通しが出てくるかもしれません。でもその先どうなるのかよく分からない。

II 主が来られるまで (1)

そんな中で今日、この一つのみことばに、今日ここで朗読していただいた一つの節のみことば、聖餐式の度ごとに読まれるこのみことばの中に、ひとつの大切な答えがあるのではないかと、そう思うに至り、今日の礼拝のみことばとして選ばせていただきました。「主が来られるまで」。「主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」。

今日で復活祭から6週間、来週で7週間目になります。40日弟子たちに現れたイエス様は、天に昇られました。そして弟子たちは「待て」と言われて二つの約束を与えられました。

一つは聖霊が与えられるという約束です。ですから私たちも、今年もまた来週の聖霊降臨日に向けて聖霊を待ち望みたいと思います。すでに来ておられる神の霊の働きが、私たちのうちにあるように、また私たちの間にあるように、私たちの周りの人達のうちにあるように、待ち望みましょう。もう一つは主が再び来られるという約束です。私たちはその日を待ちます。

「いつまでですか」。神様が働いてくださる時は、その時々にあります、時代時代にはありますが、究極的には、「主が来られるまで」そのときに向かって私たちは歩んでいるのです。私たちの悩み苦しみ、私たちの不自由さとか忍耐も、「主が来られる時」までなのです。その時に私たちの苦しみの終わりがあります。無限にいつまでも続く悩みなのではないということ、このみことばから教えられまし

た。ずっと続く試練ではないのです。そのことに気づく時、ほっとするような思いになりました。「主が来られるまで」なのです。この忍耐には、この苦しみには終わりがあると聞くと、ほっとします。

限られたときの苦しみ、そして使命なのです。 “それならやらなきゃな” というふうにも思います。しかし同時に「主が来られるまで」というのは、もっとずっと遠い先のようにも思えます。この世の終わりの時のことですよ。それが遠いのか近いのかは、私たちには分からないのですけれど、すべてが終わっていく。この時代が終わっていくときなのですから、そこまで待たなければならぬのでしょうか、という思いにもなります。“今のこの状況が、イエス様の再臨、この世の終わりの日まで続くわけではないですよ” と神様に言いたくもなります。このコロナウイルスの問題はこの世がある限りずっと続くというわけではありません。終わりが来ます。いつどのように終わるのか、終わったときどうなっているのか、まだ見えませんが終わりは来ます。

しかし同時に、より広い意味での私たちの試みというのは、一つのウイルスの脅威が減ったとしても、別な形の試みとしてやってきて続くでしょう。そうすると私たちの試みは、忍耐、苦しみは、やはり「主が来られるまで」続けるのだということも確かなことということになります。

Ⅲ コロナ後は

今コロナウイルスという一つの感染症によって、世界中の国が同じ影響を受けています。同じ危険にさらされて、同じものに対処して乗り越えようとしている。その中でそれぞれの国の違いが、何かあぶり出されているように思います。国民性の違いとか、考え方とかやり方、コミュニケーションの仕方、国によって違うんですね。人間の性質や政治体制によっても変わってきます。そういうものが何だか見えてくるようにも思います。日本の場合、緊急事態というものを、“憲法を変えたい” という思いのために利用したいと思う人達が現れるということが予想できますし、これからも現れるでしょう。そしてオリンピックをするのかしないのか、“開催するならばこういう形です”、“しないとするならこういう場合にはしません” というようなことがあまり見えない。たぶんするにしても、しないにしても、6ヶ月ぐらい前には“この場合はこうなりますよ” っていうことを言っていないと、難しいんじゃないかなって思いますけれども、もうその時を過ぎている。そんな状況です。オリンピックを控えているのに、他の国に比べてワクチンの供給が遅れ気味である。それが日本の状況です。非常に難しい状況です。“こういう状況なので”、“こういう要素があるので難しい状況です”、“しかしこういうことを考えて判断していきます” という情報がなかなか出てこないということですね。いつまで耐えればいいのか、ワクチンは一体どうなるか、オリンピックは一体どうなるか、選挙は一体どうなるか。

そしていつ教会は、全員で集まって礼拝をし、合同礼拝をささげて、思い切り声をあげて、賛美ができるようになるでしょうか。いつ新しい歌を歌えるようになるでしょうか。なかなか見えないところです。そして食事の交わり、一緒にお話ししながら食べる、これは大切なことです。それをいつ、どう再開できるのか。まず今は一緒に食べないというふうになっていますね。教会の礼拝の後とかに、一緒に飲

食しないってことにしています。今後何か飲食をするにしても、話さない、黙ってするっていうことしか出来ないだろうと思います。いつ再開をフルにできていくのか、その時にどういう配慮、どういう準備が必要になるでしょうか。

この第1コリントの11章には、聖餐式のことを書いてあります。当時のコリントの街の背景があるわけですね。そこはギリシャの街でありますけれども、ローマの社会に組み込まれている街です。豊かな人もいれば奴隷、解放奴隷という人たちもいる。そういう状況の中で、教会堂があって集まっているわけではなくて、誰かの家、それも大きな家を持っている人の家に集まって礼拝をしていた。礼拝と聖餐式と食事の交わりをしていた、ということがこの背景にあります。そしてそこには不公平があったり、ある人たちが食べているのに、ある人達は何も食べてないってことがあったりしたわけです。当時は奴隷も社会の中に存在していたので、世の中では、食べる場所が違う、食べる物が、豊かさや貧しさによって区別されるのが当然だったとしても、主の教会ではそうではないはずだと、パウロは言いたいのだらうと思います。みんなで、立場の違いを超えて、同じ場所で同じものを食べようではないか、分かち合おうではないか、それがパウロの言いたい事でした。礼拝をして聖餐式をして食事の交わりをするということは、本来大切なことです。ですから私たちも今後のために準備をしましょう。いつ再開するにしても準備していきましょう。3ヶ月から6ヶ月くらい先のことの準備をしたらよいのだらうと思います。

しかしコロナが終わったならば光は見えるのでしょうか。コロナの問題は終わっていくでしょう。その時光は見えるのか、どうでしょうか。世の中が良くなるかもしれないし、そうでないかもしれません。コロナ後もどうなるか見えない、不安だな、そういうふうに思う。そういう中でどう受け止めたら良いのでしょうか。世界や日本の社会はどうなるか、また世界の教会、日本の教会、また春日部福音自由教会に、この街とこの教会に、未来の光は見えるのでしょうか。今はよく分かりません。

もしかしたら新しい賛美、新しい歌が次々に生まれてくる。世界中で、そしてこの日本でも新しい賛美が次々に生み出されるということが起こるかもしれません。そうなったら素晴らしいと思います。新しい歌、新しい曲、新しい詩、それをみんなで歌う日、待ちたいと思います。しかしコロナが終わっても、尚苦しくて、行き詰まるかもしれません。世の終わりに向かって、さまざまなことが起こり、人と人との愛が冷えるであろうと言われていて、人と人がますます分断されて、みんなの心が寂しくなって、心が満たされない。切り離されて寂しいと思い、個人主義になり格差が広がる。そして愛が冷えるかもしれません。人と人の関わりが、結びつきが、ますます失われていく。でももしかしたらそういう中で、一人一人の「神のかたちに造られているという」価値が伝わるようになって行くかもしれません。存在の尊さ、人と人が共にいることの意味の重さのメッセージが、今よりも届くようになるかもしれない。そういう希望も抱きたいと思うのです。人間は「神のかたち」に造られた者なのだ。一人一人が、その人しか持っていない、尊いだ一つ的人格を持っている。そして人間は、人と人が結びついて

生きるように造られているのだということに、行き詰まった後、逆に目が開かれていくかもしれません。本当に、自分たちにはそれが必要だ、人と人が向き合って一緒にいることが必要だということに目が開かれ、そのような「神のかたち」なのだというメッセージが届くようになるかもしれません。

IV 主が来られるまで (2)

「主が来られるまで、主の死を告げ知らせる」のです。教会が祝福の器となることができるように祈りましょう。この春日部の街が、西口が5年後10年後どういうふうになっているか。それもなんか計画が出てきたような、見えるような、見えないような感じがしますが、いずれにしてもこの街にとって、この街の人たちにとって、“この教会の存在が、祝福となりますように”と祈りたいと思います。日本のあらゆる街々で、日本の諸教会が、日本の民のために祝福となることができますように。世界において全教会が全世界の人々の祝福の器となることができるように、忍耐して、今から祈っていきましょう。

「主が来られるまで主の死を告げ知らせる」。 私達の使命はその死を告げ知らせるということです。主の死を告げ知らせるとは、どういうことか、三つのことを考えてみたいと思います。

一つは主イエス様の十字架の死、死の事実です。そしてもう一つは、それは身代わりの愛だということです。イエス様が死なれたのだということを伝える、その死は身代わりの愛だったのだということを伝える。そして三つ目に、そこに私たち人間への、人類への愛があり赦しがありいのちがあるということ伝えて行くということです。

イエス様の死に、まことのいのち、神を知り共に生きるいのち、永遠のいのちへの道がある。そのことを告げ知らせていく。聖餐式を行って、パンを食べ、杯を飲むたびに、主の死を覚えて、記念して礼拝をささげて思い出すということです。心に刻むということです。そしてそれを伝えていくということです。

「主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのだ」。これが私たちの大切な使命です。主が来られるまでです。あとどれだけの時間があるか、どれだけ長いかわかりませんが、あるいはどれだけ短いかわかりません。その分からない時の中で、いのちある限り、限られたいのちを神にささげて、使っていただきましょう。一人一人に生活の場がありますね。仕事の場があり、家庭があり、生活の場があります。仕事をして家庭を築いて、そして教会を建て上げて行きましょう。そしてそれぞれの場で、皆さんそれぞれ自分が置かれている場、例えば職場や学校、それから家庭や親戚の中に自分がいる。それから地域や教会の中にいる。置かれている場がもし三つあるとするならば、それぞれの場で、“主の死によって生かされているこの私がここにいる”、ということを実証させていただき生涯としましょう。職場や皆さんの学校の人たちに、皆さんの家族に親戚に、そして教会と地域の人たちに、主の死を実証していきましょう。“主イエスキリストの十字架にいのちがある。そこに希望がある、そこに未来がある”と実証していただきましょう。「主が来られるまで」。時は長いかわかりませんが、しかし終わりがありません。

す。その使命にも終わりがありません。限られています。「主が来られるまで、その死を告げ知らせるのです」。

V 今は不完全でも

今私たちは不完全です。主が来られるその時が来るまで、私たちは不完全な状態に留まって、生かされています。一人一人の人間も不完全、人間の組織もそうです。欠けだらけで、自己中心で、わがままになってしまう。ときには弱さを抱えて生きている。いろんな弱さがあります。あるいは傷ついている。お互いがそういう人間です。あるいは高ぶってしまう。隣人を見下したりさばいたり、この間も「自分もそうだな」って言いましたけれども、人のせいにしてしまったりせずにはいられない、悲しい罪人の私たちです。私たちは、今は不完全な者として、この世に生きている。

でも同時に赦しがあるということを知っています。聖餐式で、パンを食べ、杯を飲むたびに、主の十字架に赦しがあると、そのことを思い出し、心に刻み、「あなたの罪は赦された」という、不完全な私たちへの、赦しと憐みのことばを毎回毎回聞き直します。そして赦された罪人として、キリスト者は今この世を生きることができます。そういう者として、赦された罪人として、私は今ここに生きています。それを証しできます。証しできるんですが、なお不完全なのですね。不完全なので苦しい状態が続きます。

VI 「その日」新しくされる

でも一つの事を覚えましょう。それでも完全にされる時が来るということです。主が来られるまで、待たなければなりません。でもその日私たちは新しくされます。主が来られるその日、世界は新しくされ、人間も新しくされます。主が来られるまで、その日に向かって進みたいと思います。私は、イエス様がもう一度来た時にはこの世界は消えてなくなってしまう、と言うかですね、消滅するのかなというふうに、思っていましたけれども、今は消滅するっていうよりは、新しくなるんだっていうふうに信じています。その時、人間も新しくなります。どういう順序でどのように変わるのか解らないことがありますけれども、しかし完全なからだになる、朽ちない栄光のからだに変えられる時が来る。今は不完全な世界と不完全な人間が、完全にされる、新しくされる時が来る、そう信じます。「主が来られる時まで」、この中途半端な状態は続きます。

しかしその日が来ます。その日は終わりの日であり、キリストの日です。さばきの日であり同時に新しい始まりの日です。その日を目指して、その日に向かって、目を上げて進みましょう。今日この後歌う賛美は、讃美歌 21 の中から選ばせていただき、週報に掲載してありますが、「新しい天と地を見たとき」という賛美です。本当は全部 4 節まで歌いたいのですが今たくさん歌うことができない、一節だけをしかもより小さい声で歌いましょう、ということなので歌詞をお読みしたいと思います。

1 節から「新しい天と地を見たとき 最初の世界は 過ぎ去りゆき、新しい都、エルサレムは 花嫁のような 姿で来る。」2 節「天よりみ声が 響き渡る、『神の民として 生まれ変われ。み神はわれらと 共にいます。』 喜べ、楽しめ、躍り上がれ。」

歌詞を読んでいると、“本当は聖歌隊に、こういう歌を歌って欲しいんだけどな” っていうふうに思います。なかなか練習も、思うようにならないところですけども、忍耐しつつ、祈りつつ、考えながらやってくれているので、待ってたいと思います。3 節、「悲しみの涙 今ぬぐわれ、嘆きも死もなく 労苦もない。古いものすべて 過ぎ去りゆき、見よ、主はすべてを新たに作る。」「マラナ・タ、主イエスよ、おいでください」という 4 節の歌詞は、この後ともに歌いたたいと思います。「神の民として生まれ変わる」という歌詞が 2 節にありました。神の民として生まれ変わる時が来ます。必ず来ます。完全になるのはこの先なのです。今は、私たちは不完全です。でもすべてが新しくなる時が来る。そしてそこまでの間、一つ一つ、私たちはこの世にあって、不完全なからだをもって、不完全ないのちですが、できることをしていきます。例えば、私たちが祈ること願うこと。それはこのこれからの時代に、新しい伝道ができるように、新しい証しをすることができるように、それも一つの教会がだけでなく、誰か優れた賜物を与えられた人が、多くのことをするというだけでなく、皆が協力し合い、諸教会が協力し合って、新しい伝道と証しができるようにと祈りたいと思います。それが取り組むべきことの一つでしょう。

例えば他にこの中央会堂を新しくしていかなければいけないなという祈りもあります。先週は草加教会の新会堂を見学させて頂いて、建築までの経緯を伺いました。私たちの教会もそこに向かって祈りを一つにしていきたいと、もう一度思わされたところです。その時には、今私たちが三つの会堂に分かれて礼拝していますけれども、三つの会堂が三つあるままだとしても、みんなでこの中央会堂のために祈り一緒に作っていくことが必要です。3 会堂 4 会堂の人達皆が一つとなること。若い人、中間の世代、また先輩の世代、子供たちまでみんなが一つとなることが必要でしょう。そして他の教会の経験から聞かせていただき、学ばせていただくことも大事ですが、これまでにしてきた私たちの教会の会堂建築の経緯、前のこの中央公会堂の建築の時のこと、1986 年の丘の上記念会堂の時のこと、2010 年の庄和会堂のことなど様々な経緯を全て踏まえて、そして全てを活かして、統合して、恵みの部分感謝の部分、また痛みや後悔などあるかもしれませんが、全てを含めて統合していきたい。神の民として生まれ変わりたい。「私達を新たにしてください」と、祈りたいと思います。私たちは神の民です。この 2 節の歌詞は歌うことはできませんけれども、心に留めていただければと思います。神の民キリストの民です。「私たちはキリストの証人です」と言えるようでありたいと、主が来られるまでその死を告げ知らせるのです。

祈りたいと思います。主が来られる日に向かって歩ませてくださいと。お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。主よ、私達を助けてください。私たちは今悩みの中にあり、先の見えない中にあり苦しんでいます。もがいています。「いつまでですか」と言いたくなることが、しばしばあります。あなたが時を備え、助けを備えてください。「主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」とみことばが語っています。私たちはその使命を果たし進まなければなりません。乗り越えなければなりません。助けてください。不完全な私達を助け、導き、完全にされる日まで私達を捉え、導いてください。あなたの恵み深い御手によって、主イエスキリストの御名によってお祈りします。 アーメン。